

Title	ヒマラヤの山並み
Author(s)	イクバル, シャイフ ムハンマド; 松村, 耕光
Citation	印度民俗研究 別巻. 6 p.3-p.7
Issue Date	2020-12-31
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/78710
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

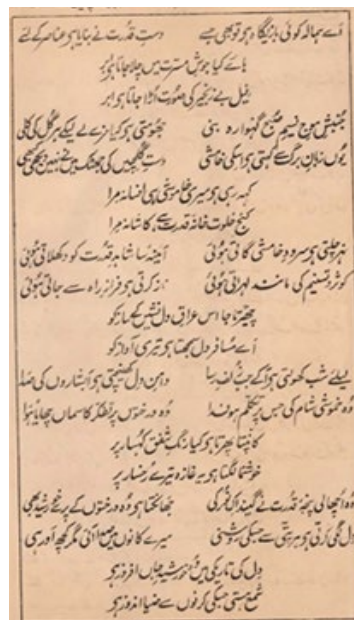
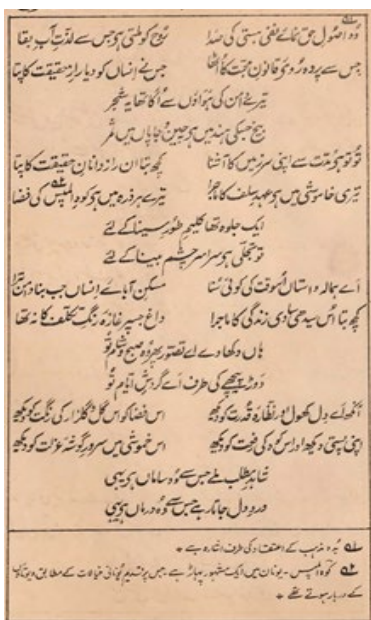
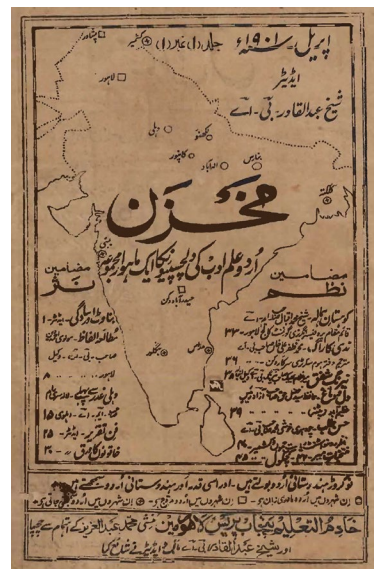
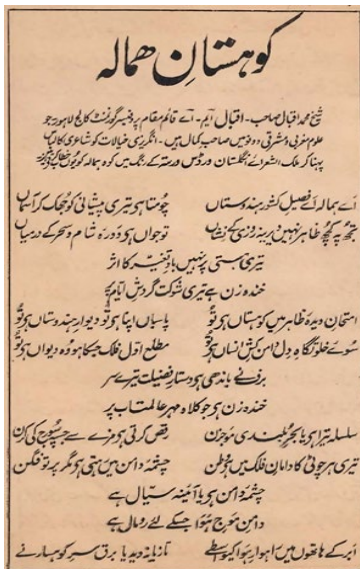
<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

ヒマラヤの山並み

シャイフ・ムハンマド・イクバル

松村 耕光 訳・注



ガバメント・カレッジの臨時教員で、西洋東洋諸学に通曉しているイクバル（修士）が、イギリス的思想に詩の衣を着せ、イギリスの桂冠詩人ワーズワスのような言葉遣いでヒマラヤの山並みに次のように呼びかける――

おお、ヒマラヤよ、インドの国の城壁よ¹

天は身をかがめておまえの額に口づける

おまえには老いの表れがなく

循環する朝夕の中にいるのに常に若々しい

おまえは変化の風の影響を受けず

その威厳ある姿は変転する日々を嘲笑^{わら}っている

肉の眼では山としか見えないが

おまえは私たちの守護者であり、インドの防壁である

おまえは人を惹きつけ、内省へと誘う

おまえは詩集であり、天はその初句である

雪がおまえの頭に巻いた栄誉のターバンは
世界を照らす太陽の冠を嘲笑^{わら}っている²

これは山並みなのか、海の大きなうねりなのか
その上では太陽の光が楽しく踊っている

おまえの頂きはいずれも天の裾に住みつつも

麓の泉にその姿を投じている

麓にあるのは泉なのか、液体の鏡なのか

風の揺れ動く裾はその拭き布となっている

風の駿馬を打たせようと雲の手に

山頂の稲妻は鞭を与えた³

おお、ヒマラヤよ、おまえもまた

自然の手が四大のために作り出した競技場なのであろう

ああ、雲は何と嬉しそうに流れて行くことか

鎖を解かれた白象のようである

朝のそよ吹く風は揺り籠となった

薔はみな何と楽しげに揺れ動いていることか

薔は無言であるが、花びらの舌はこう語る――

「花をもぎ取ろうとする者の手を見たことがない

私の沈黙はこう語る――

深山幽谷の片隅こそ私の住处である、と」

清流が沈黙の歌を歌いながら流れ出る

大自然という佳人に鏡を差し出しながら

カウサルやタスニームのように波打ちながら⁴

高いところから身をくねらせながら

心に染み入る調べを奏で続けよ

おお、旅人よ、心にはおまえが発する楽の音がよく解る⁵

夜の美女^{ライラー}が現れてその豊かな黒髪を解くとき⁶

滝の音が心の裾を引き寄せる

言葉がその身を捧げる夕暮れの静寂

沈思の時が訪れた樹木

見事な夕日が山肌で揺らめき

おまえの頬を美しく染め上げる

自然の手が投げ上げた光の球体⁷

木々の向こうから顔を覗かせる太陽

その光は木の葉一枚一枚と戯れているが

私の耳にはこう言う声が聞こえた――

「心の暗闇に命を輝かせる太陽がある

その光によって存在^{いのち}の蠟燭は輝きを得る」

存在否定の真理の法則を告げ知らせる声――⁸

それによって魂は不死の水を味わう

それによって愛の法則の面^{おもて}から覆いを取り払われ

真理の秘密を知る手がかりが人間に与えられた

おまえの麓のそよ風によってこの木は生え出たのである

その根はインドにあり、その果実は中国、日本にある

おまえは昔から自分の国をよく知っている

真理を知るあの者たちのことを教えよ

おまえの沈黙には父祖の時代の出来事が籠っている

おまえの隅々にオリンポスの山の霊気が宿っている⁹

神の顕現はシナイの対話者には一度しかなかったが

¹⁰

明敏な眼はおまえの全身に神の光を見る

おお、ヒマラヤよ、物語を聞かせよ

おまえの麓が人類の祖先たちの住処となっていた時代の物語を
簡素な生活の物語を

仕来りの紅に染まっていなかった時代の物語を

さあ、想像の力よ、再びあの日々を見せよ

昔へと——おお、時の流れよ——逆戻りせよ

心よ、目を開き、自然の姿を見よ

周囲を、花や花園の色合いを見よ

己を見よ、そして聳え立つあの山を見よ

この静寂に人里離れた場所の素晴らしさを見よ

これらこそ望みのものの在処を示している

これらこそ心の痛みを癒す薬となるのである

ヒマラヤをインドを守る存在と見做す詩想は、イクバルの初期の代表作「インドの歌 (Tarānah-e-Hindī, 1904)」にも見られる。

世界一の高い山、天と肩を並べるあの山は

私たちを守護し、私たちを防護する

日光ですら雪を溶かすことができないということ。

稲妻を鞭に見立てている。

「カウサル (Kāushar)」、「タスニーム (Tasnim)」天国にあるとされる川と泉の名。

「旅人」清流のこと。

「ライラー (Lailā)」アラビアの有名なライラー・マジヌーン (Majnun) 物語の女主人公。ライラーは夜という意味のアラビア語 *lail* の関連語。

「球体」月のこと。

「仏教信条への言及である」という註が付けられている。

「オリンポスの山。ギリシアの有名な山。古代ギリシアでは神々が集まる場所と考えられていた」という註が付けられている。

「シナイの対話者」シナイ山で神と話をしたモーセ (Mūsā) のこと。

解説

原題 *Kōhistan-e-Himālah*。作者は、現代ウルドゥー詩に大きな影響を与えた詩人思想家シャイフ・ムハンマド・イクバル (Shāikh Muḥammad Iqbāl, d. 1938)。この詩は、ラホールの或る文学サークルで発表され、イクバルの友人アブドゥル・カーデイル (ʿAbd al-Qādir, d. 1950) が発刊した雑誌『マフザン (Makhzan 宝庫)』一九〇一年四月号 (創刊号) の詩の部の最初に掲載された。イクバルのウルドゥー第一詩集『鈴の音 (Bāng-e-Darā, 1924)』の巻頭を飾る詩でもある。この詩に関してアブドゥル・カーデイルは、詩集『鈴の音』に寄せた序文で、「イギリス的な詩想があり、ペルシア的な形態があった。さらに愛国主義 (watan-parastī) の味わいもあった。時代精神や時代の必要に合致していたため、非常に好評を博した」と述べている。

この詩は、詩集には「ヒマラヤ (Himālah)」という題名で収録されており、詩集収録時に詩句の改変や入れ替えが行われ、雑誌編集者が記したと思われる冒頭の文や第八、九、十、十二連及び註が削除された。

翻訳には、『マフザン』創刊号を用いた。